

野球場のバックスクリーンにタイトルを映して表紙を撮影しました。
お集まりいただいた皆さま、ありがとうございました。(写真は投影テスト時)



なんと！フルカラー64ページの豪華版

藤里町の雑誌をつくるプロジェクト…始まっていたのもあまり知られていないかもしれませんが、いよいよ大詰めを迎えようとしています。作成に携わるのは、「かもや堂」リノベーションも中心に関わっていた町民有志のReデザイン委員会と、藤里町地域おこし協力隊2名と、協力をお願いを受けて下さった町内の方々です。さらに、町外からアドバイザー井口桂介さん、デザイナー根岸那都美さん、カメラマン船橋陽馬さんを助っ人に迎えて作成しています。

テーマは“とんじこんじいくための藤里マガジン”です。藤里町内の皆さまはもちろん、町出身者や外の人にも楽しんでもらえる1冊にするべく、企画を練り上げて進めています。雑誌『とんじこんじ』は、『とじこじ』の特別版です。意味はそのまま、いつもより気合の入った『ん』を表記に入れています。あわてずいそがず、足元の大切なものを探しにいこう、という思いが込められています。



《発行》
地域おこし協力隊
@鳥谷場仮事務所
藤琴字家の後17-8

藤里町 Re デザイン委員会がつくる

雑誌『とんじこんじ』来月創刊！

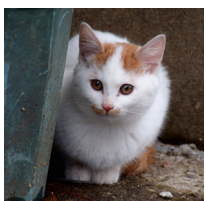
をめざしています!!

収まりきらない藤里の魅力を1冊に

特集の一部をご紹介しますと、藤里のソウルフード!? 「なんこ鍋」(馬や牛のホルモンを煮たもの)や、雪国の暮らしを支える薪ストーブ、冬の白神山地一泊ツアー(無事に帰ってこられるのか……)、東京で働いている藤里出身者のインタビューなど、たくさんの企画を詰め込みました。

雑誌の顔となる表紙は、清水岱野球場の電光掲示板にタイトルを映して、駒踊りや壮士舞、高山太鼓、婦人会などの藤里町の方々、約50名に集まっていただきました(これが発行される頃には撮影完了の予定です)。

雑誌『とんじこんじ』が、藤里町の魅力発掘につながるとともに、これまで知らなかった人にも「藤里町っておもしろそう!」と興味を持ってもらえるようなものにしたいと思いながら頑張っています。ぜひご覧ください!



美猫をあつめた癒し系ページも。



町外からプロのカメラマンさん、デザイナーさんに来てもらって制作を進めています。いつもの景色が一味ちがって見えるかもしれません。



企画したものの、とても奥が深かった藤里の「なんこ鍋」。スーパーの前で聞き込みなどの地道な調査を頑張るメンバーもいました。



「え、取材なんてしたことないよー」というメンバーも、社会福祉協議会の「元気の源さん」に伺って、おばあちゃんたちに質問をぶつけます。



図書館を訪れた赤ちゃんの気を引いて、視線をカメラに向けるべく頑張る3名。

「かもや堂」リノベーションも記事の一つです。模型を見て、委員会で話し合いました。



世界遺産センター藤里館で開かれた木工ワークショップでは、秋田杉やブナなどの木材をみんなで加工しました。とてもにぎわったイベントの様子もお伝えします。

雑誌『とんじこんじ』は、現在改装工事中的新「かもや堂」オープン3月19日(土)に合わせて発行し、町内無料配布の予定です。頑張ってますので、どうぞお楽しみに!

石橋談義

藤里地方は、藩政時代から山林地帯として注目され、能代湊から上方へ売り出された杉材の多くは藤里産という記録もある。その時代は農業が最大の産業で、杉材や木挽き、炭焼きなどは極く少数であったが、近代になって木材需要も増え、制度的にも藩から国、郷村、民有などに変わり、その産業構造も大きく変化した。そして明治の頃から山林の恩恵を受け、徐々に山持ちや労働者も増え、営林署や製材所もでき、山林従事者も樺太や北海道への出稼ぎも多くなり、その逆に津軽などから馬搬作業に来村する者もあつた。ところで、当地には世界遺産があり、80%を超える山林地を有し、過去にも木材生産地とし繁栄した時代もあつた。環境的には申し分なく、他町村も羨むほどののに、何故木材産業の再起に本腰を入れないのか不思議でならない。▼先日、NHKの番組「クロ現」を見てみると、紙漉の技術を更に進め、木材や草、藁などが鋼鉄に代って自動車のボディなどに利用されるのも時間の問題だという。それに既に木材パイオ発電工場など各地で稼働している。また北海道の800人の少村には全国から公募の木材工芸高校生が寄宿している。木材産業の間口は広い。差し当たり「ゆとりあ」の温泉加熱は木材利用にしてはと思うが、どうだろうか。(F)



本紙『とじこじ』についての意見交換会を開催します。

2月24日 18時30分～20時
開発センター1階第一会議室
(田代食堂向かい)

いつも『とじこじ』を読んでもくださり、ありがとうございます。毎号、皆さまに楽しんでいただけるか、ドキドキしながら作っています。

今回、藤里町民読者の皆さまの意見・感想を直接聞きたい！という思いから、『とじこじ』意見交換会を企画しました。

「こういう特集が読みたい」「このイベントも載せてほしい」「この人を聞き書きで取材したらどう？」など、今後の紙面づくりにつながるようなご意見や、率直な感想を聞けるとありがたいです。

当日は、藤原がなんとなく待ちかまえている感じでいますが、途中参加も退出もOKです。日程が合わない方は、引き続き開催する予定ですので、次回ぜひお越しください。

とんじこんじ抄

海外から日本に来るマニアな観光客は増えています。彼らの望むのはそこにしかなく、地元人が好むものが多いそうです。たしかに「地元・人気」という検索で自分も探しています。旅先でどういう心情で、どういう行動をするのか。置き換えれば藤里の強みがチャンスにつながる。旅先で藤里を想うことはいかがでしょうか。(シャケ)

編集後記

今号はこれまでで一番、紙面に「とじこじ」の文字が多いかもしれません。(藤原)



高山クラブの会長、もうひと頑張りだな。

聞き書き 第10回
高山クラブ会長
高石沢・石田圭子さん

海のそばで産まれて。

7人兄妹の2番目、長女として、旧・峰浜村の水沢で産まれました。

子どもの頃は、浜に遊びに行くこともあったよ。母親が健康でなかったから、私が一番上(女の子)だすべ、妹がた学校行ってるし、学校終わって兄弟の面倒みて、って生活してた。親もそれではかわいそうだからって、青年会入れてくれて、踊りに行ったり、遊びに行ったり。

戦争もあつたけど、家では父が塩作って、塩とお米を取り換えて、ままけねとか腹減った、とかはなかった。塩は、浜にみんな小屋建てて、大きな鍋で煮て作った。最後はござで乾燥させて。パラパラと、きれいなものであつたよ。

藤里町のお百姓さんへ嫁ぐ。

茂太郎さん(夫)との出会いは、昔、材木所の事務所に頼まれて行つたの。事務所と飯場で、帳簿つけたり、販売や給仕をしていた。茂太郎さんの姉さんの旦那さんが私を見初めたんだね。俺の両親は、百姓したことないのたいした心配して、実家のご飯時には、大丈夫だべがつて、しばらく気にしてくれただうだ(笑)。

出稼ぎも人に恵まれた。

夫は農家もやつたけど、田んぼ終わると、北海道に山仕事の出稼ぎに行つた。山がちよつとダメになつてからは関東で土方。

23歳で嫁いできたのは「さました」の家。昔、家の上のほうに、殿様がいたつて聞いた。それで、屋号が「さました」。義理の両親いて、夫の下の弟妹4人いて、にぎやかだったよ。やつたごとなかった農作業は難儀もしたけど、茂太郎さん面倒見良かったし、馬ベコの餌の乾燥した草背負わせてもらつたり、田んぼは近所の結つこで行つたり来た。舅ばあさん(姑)もよく面倒みてくれた。子どもできてからは、午後は田に出なくてもいいつて、昼間から休みにいがつた。近所の人もさましたのあねちや、なんも百姓もしたごとなねだばつて草背負つて歩いたり、田んぼやるよりがんばるつて話して。他のお嫁さんからは、「俺の舅あてこすりて、おめのごとほめるつたおな。おれのごとなんばがんばつてもいぐみえねして」つて言われて、「あいすかだね...俺にがつておめ難儀するな」つて話したことあつた。舅ばあさんは人つこいがつたから、幸せだったなつて思う。

自分でも、子育て終わつて孫も産まれてから、10年家政婦に出た。夫と上野駅で別れて、お盆や正月は一緒に戻つて。相撲部屋の親方についたこともあつた。親方は気難しくて、私で家政婦55人目(笑)。「田植えだから家に一旦帰らねばね、あでならねがら違う人頼んで下さい」つて話したら、帰る日の朝涙ぐんでくれた。「石田さんのように言葉つかけてくれる人いいな」つて、大事にしてもらつた。その後、亡くなるまで私ついて見送つたよ。人に恵まれたなと思う。

「つこやつてくれだやあ」。

老人クラブ(高山クラブ)との関わりは、61歳の時。出稼ぎやめて家でのおんびりしようとしてたら、近所の当時の会長に、会計と女性リーダーと頼まれたの。その後会長が亡くなつたり、誰もやる人いなくて、一度引き受けたら、「もうさつとやつてくれだやあ」で10年。まず義理人情でやつてるつた(笑)。

昔は、宴会も多かった。飲んでカラオケで踊つて、せば奥さん転ぶつて心配するけど、豊だから大丈夫だあつてしたり。あの程度の時間になると家族迎えるにきて、まだ飲むつてごんぼほつた人もいた(笑)。旅行も行ったよ。今は4月の総会やた

これからは、ボケないように、元気でいたいな。町外の娘のところに泊まりに行つても、2泊もすると家が恋しくなる。皆さんにがんばつてくれて言われるのありがたいし、やつぱり老人クラブの会長としても、もうひと頑張りだな。(聞き手・布川)

いしだ・けいこさん ●昭和9年旧峰浜村水沢生まれ、昭和32年藤里町に嫁ぐ。高山クラブ会長を務め10年になる。畑でとれたものや山菜を森のえきに出している。お手製の切干大根はやわらかくて美味しいと評判。



畑で作った大根で丁寧にする切干大根。

高山クラブで訪れた八森のハタハタ館。

